

原発ゼロ

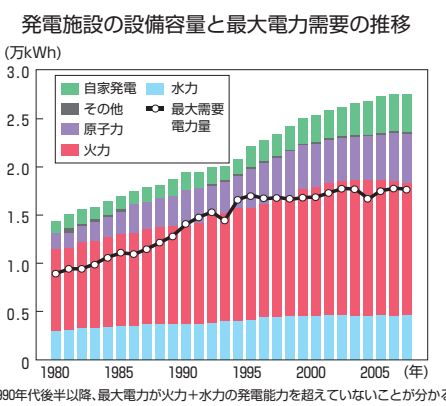
を求めて

まるで悪夢を見ているようだった。冷却不能、炉心損傷、水素爆発……。いつか事故は起こると警告してきたことが、現実となって降りかかる。テレビから流れる東京電力福島第一原発の情報に、唇を噛みしめていた。

「3・11」を振り返り、小出裕章さんは静かに話し始めた。「私は、原発をやめさせるために原子力を研究してきました。事故が起きないように、私にできることをしてきたつもりです。だからこそ、原子力の専門家として事故を防げなかったことを本当に申し訳なく思います」

故郷を追われた人々、骨と皮だけになって餓死した家畜、汚染された海と大地に思いを巡らし、悔しさと怒りをこぼす。

電力足りていない



福島第一では「収束宣言」後も危険な状態が続いている。政府や東京電力は「安全」を強調するが、1331体の燃料棒が保管されている4号



京都大学原子炉実験所助教

小出 裕章さん

こいで・ひろあき 1949年、東京生まれ。東北大学在学中に女川での反原発闘争に触れ、原発をやめさせる研究を続けることを決意。74年に同大学大学院博士課程修了。同年から現職。著書に「隠される原子力・核の真実」(創史社)など多数。

「たゞエネルギーが足りないとしても、原子力に手を付けてはいけないのです」

「大阪原発の再稼働を尋ねると、「大阪だけが危険なわけではない。事故は予想を超えて起る。それが福島第一の教訓です」と、いったん言葉を切り、原発事故の被害に思いを馳せながら、こう続けた。

気付いたリスク

1970年、原発建設で揺れていた宮城県・女川町。「原発が安全と言うのなら、なぜ仙台に造らなにか。住民から投げかけられたこの問いが、当時、東北大学工学部原子核工学科の学生だった小出さんの人生を決めた。原子力の平和利用を夢見ていた青年が、初めて疑問を抱いた瞬間だった。「原発は都会では引き受けられないリスクを持っている。気付いてしまった以上は、過疎地に原発を押し付けるようなことは許せませ

「原子力ムウのなかで、原発の危険を問うことは、言わば「捉破り」のようなものだ。大勢に抗う研究は、困難を伴う。73年には、就職が決まっていた電力中央研究所の内定が取り消しに。74年に大阪府熊取町にある京都大学原子炉実験所に採用されたが、肩書きは38年間、助教助手のまま。異端視されながらも、志を同じくした5人の研究者と共に、熊取6人組」として原発の危険性を訴え続けてきた。

「私は原発を一刻も早く廃絶させることを願って研究を続けてきました。どう生きるかが興味の対象であって、ほかの人が原子力の旗を振っても関係ありませんでした。嫌がらせを受けたり、差別されたりしたことは一度もありません。それに、自由に研究できる今の立場が好きですか



研究室では電灯もエアコンも付けずパソコンと向き合う

志ある声広げれば廃絶できる

「3・11」後、毎週末は講演で全国各地を飛び回る。執筆した『原発のウソ』(扶桑社新書)はベストセラーに。「不屈の研究者」として、知られるようになった。取り巻く環境は変わったが、質素な研究生活は変わらない。

「私の力は圧倒的に非力です。一人ひとりの力なんて弱く、小さい。しかし、今、皆さんが自ら考え、湧き上がる思いに從って発信し、行動しています。歌でも良いし、絵を描いても良い。署名やチャームに参加することも一つの手段です。できることから始めることが大切です。この志ある声が大きくなれば、原発を廃絶させることができる、と私は思います」

7月1日、野田政権は原発存続へ、再び舵を切った。小出さんの目には、一度もありません。それに、自由に研究できる今の立場が好きですか

流れが変わった

7月1日、野田政権は原発存続へ、再び舵を切った。小出さんの目には、一度もありません。それに、自由に研究できる今の立場が好きですか

「私は原発を一刻も早く廃絶させることを願って研究を続けてきました。どう生きるかが興味の対象であって、ほかの人が原子力の旗を振っても関係ありませんでした。嫌がらせを受けたり、差別されたりしたことは一度もありません。それに、自由に研究できる今の立場が好きですか